

続 旅の空、時々 地のいも アメリカ合衆国アイダホ州編

Mohamad Chikh Ali

編訳 夏秋 啓子

アイダホと言えば？

アメリカを旅行した人ならだれでも、巨大なコーラ飲料のコップ、山盛りのフライドポテトにびっくりした、あるいは辟易した経験があるに違いない。多量のフライドポテトをものともせず食べる体格のいい人々、あるいは、余ったポテトが惜しげもなく捨てられる様子にも驚かされる。どれだけたくさんのフライドポテトを、アメリカ人は消費しているのだろうか。

アメリカにおける一人当たり年間フライドポテト消費量は、44ポンド（約20kg）という報告がある。それらに加えて、さらに冷凍品などいろいろなジャガイモ加工品が消費されるわけである。アメリカ全体の一人当たり年間ジャガイモ消費量はやや減少しつつも110ポンド（約50kg）とされている。実のところ、その消費量は、イギリスやベルギーなどヨーロッパ諸国よりは少ない。さて、テレビコマーシャルのせいか、日本ではアイダホ州というとポテト！と連想する人が多いようである。そんな、アメリカ合衆国アイダホ州に、ジャガイモウイルスの研究のために留学している筆者が、アイダホポテトの実態！？に迫ってみた。なお、筆者はシリア出身。以前に本エッセーシ

リーズのシリア篇も執筆しているので、こちらもご高覧いただければ幸いである（いも類振興情報No88、2006年）。

アメリカの北西部に位置するアイダホ州

アイダホ州は、アメリカ北西部に位置し、北はカナダと国境を接している。南側は、ネバダ州やユタ州へ、東側はモンタナ州とワイオミング州と続く。東側は、ワシントン州やオレゴン州があり、太平洋を通して日本へと向かうことができる（図1）。アイダホ州の面積は21万700km²であり、アメリカ50州のなかでは14番目に大きい。14番目とはいえ、日本の面積が約37万8000km²であることを考えると、日本の面積の半分を超えており、その巨大さがわかる。しかし、その人口は156万人で、人口密度は低い。

アイダホ州は日本と同じく山が多く、その自然の風景の美しさが自慢となっている。日本ではグランドキャニオンが有名だが、実は、アイダホ州にあるヘルズキャニオンは北アメリカでも最も深い渓谷（深さ約2,400m）として名をはせている。同じく日本ではナイアガラの滝が有名だが、アイダホ州にある148mの高さを誇るショ

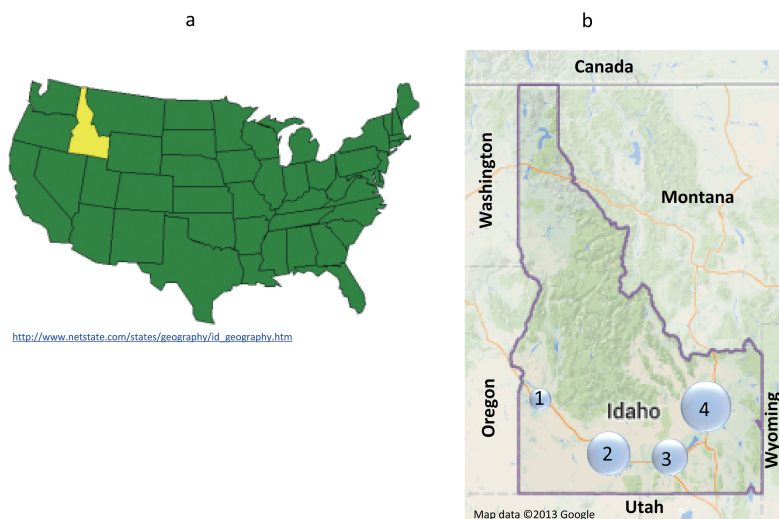


図1 a. アメリカの地図に見るアイダホ州、b. アイダホ州と主なジャガイモ栽培地帯

ショーニ滝も見逃せない。アウトドアスポーツが好きな人々には多くの楽しみがある州であり、日本人には意外に知られていないのも残念である。筆者は中東の国シリアから日本に留学して学び、日本の美しさを良く知っているが、現在の勉学の地、アイダホ州の魅力もまた素晴らしいものがある。

アイダホ州の州都はボイシー。日本人でボイシーという地名をご存知の方はあまりいないのではないかな？

アイダホ州の気象

アイダホ州は広だけあって、その気象を一口で説明するのは難しい。太平洋の影響を受け、気象は温暖といってもよい。州都ボイシーの気象を見ると、月平均降水量が11月から5月くらいまでは30mm程度、真夏は乾燥している。7月と8月は30℃を越えることもあり、また、12月や1月には氷点下5℃くらいまで下がることもあるものの、総じて穏やかといっていい。もちろん、山間部では降雪がある。

アイダホ州における栽培可能期間（凍結や降雪あるいは霜の無い期間）は地域あるいは標高によって異なるが、長い場所では200日程度とされる。一方、標高が高いなど厳しい土地では年間の半分以下しか作物の栽培ができず、牧畜などが優位となる。

ジャガイモ産地としてのアイダホ州

ジャガイモといえばアイダホ州というのは、日本でだけ知られることではない。実際にもアイダホ州はジャガイモの産地としての知名度を売りものの一つにしているようなところがある。北アメリカにジャガイモがもたらされたのは、当時のバミューダ総督が、ジャガイモを含む野菜類の種子を、バージニア知事に贈った1621年のことだといわれている。

アイダホ州でのジャガイモ栽培の古い記録は、1836年に北部のネイティブアメリカン（インディアン）居留地だったラブワイという場所で、長老教会派というキリスト教の一派による宣教師であるヘンリー H. スパルディングによる栽培である。スパル

ディングは同地の先住民であるネイティブ・アメリカンにキリスト教を布教しようと同地に住んだのだが、当時、彼らがしていたように狩猟や採集に頼るのではなく農業によって食料を調達できることを教えようと、考えてジャガイモ栽培を行った。彼の最初の栽培は失敗したと記されているが、その後、栽培が可能になった。これが、ジャガイモで有名なアイダホ州でのジャガイモ栽培の開始である。

アメリカ合衆国は世界でも、中国、ロシア、ポーランド、ドイツに次ぐ第5位のジャガイモ生産国である。その中でもアイダホ州は、アメリカのジャガイモ生産の約3分の1を担っている、最大の生産州である。2011年には約13万haでジャガイモ栽培がおこなわれ、650万tが収穫された。その価値は、10億ドルにのぼるとされる。

最近まで、アイダホ州で栽培されている品種はほとんどラセットバーバンクだったそうである。この品種は、バーバンク氏という育種家の裏庭で偶然発見されたもので、それが、各地に栽培されるようになった後、コロラド州でさらに改良されて、アイダホ州でも栽培されるようになったとされる。揚げればカリカリ、焼いたときにホクホクするという特色があるのがラセットバーバンクだ。もちろん、それは暖かさと夜の寒さ、日照、灌漑、火山灰土、といったものが適度にアイダホ州にあり、それがラセットバーバンクという品種を、また、ジャガイモ一般を最高の品質にするのだと言われている。

現在ではラセットバーバンク以外にも様々な品種が作られ、栽培されている。ラセットバーバンクはどちらかという山間地

で作られるが、これはその気候がジャガイモの原産地アンデスの産地と似ているからではないか。気象条件だけでなく、アイダホ州の労働力、ジャガイモに対する関心や知識といったものが、そのジャガイモ栽培を支えてきた。現在では、30を超える品種が栽培されている。たとえば、料理用には

ユーコンゴールド、ラセットバーバンク、ノーランド、ラセットノーコタ、ユマティララセットなどが、揚げてポテトチップにするにはアトランティック、チップイータ、アイボリークリスプなどが、また冷凍用ジャガイモとしては、ジェムラセット、レンジャー、レンジャーラセット、ユマティララセット、シーポディなどが、また、その他の加工用としてアルトゥラスなどが多様に栽培されている。アイダホ州で生産されるジャガイモのうち60%がフライドポテト用に加工されるという。

アイダホポテトの作り方

アイダホ州は輪作の一つとしてジャガイモが栽培されるので、ジャガイモは毎年ではなく、2年あるいは3年に一回作られることになる。秋には畑の準備をはじめ、次に、検査済の種いもを購入し、春先には栽培が開始される。アイダホ州ジャガイモ生産向上協会（ICIA）という団体が、すべての種いもの検査を行って、品質の確保に努めている（図2）。

検査され保証書のついた種いもは、必ずしも無病（無ウイルス）を保障するものではないのだが、一定の基準以上の品質であることを示している。認可された農家だけが種いも栽培に参画することができ、栽培期間中にも、このICIAによる査察が2度



図2 アイダホ州ジャガイモ生産向上協会（ICIA）の研究室

は行われる。病害の発生率や品種が混ざっていないかどうかなどが確認される。収穫された種いもの一部は、暖かいカリフォルニア州で冬の間に栽培されて無病かどうかなどの試験が行われる（図3）。無病であることや、除草剤の影響が残っていないことなどは、主に目視で確認されるが、ウイルス病検査のために一部についてはELISA法やPCR法による検査も行われている。このウイルス病検査は、ICIAと、筆者が籍を置くアイダホ州立大学とが担当している。このような検査に合格した種いものロットが、さらに出荷前検査を経て、農家へと届けられる。出荷前検査は、



図3 カリフォルニア州で冬に行われる試験栽培
矢印はロットの境目を示している。下図の右はウイルス病のジャガイモである。

ICIAではなく、連邦・州の検査官によって行われ、アメリカ共通の基準で格付けされる。この検査では、細菌病やセンチュウなどがゼロであることが求められる。こうして出荷される種いものは、空調された倉庫で保管され、水分喪失によりしわがでたり、あるいは不完全な環境下で発病したり、発芽したりしないように管理される（図4）。州の特産物だけに、その生産のための種いもの生産にも注意が払われている。

アイダホ州と日本

アイダホ州にはジャガイモ博物館まである。アイダホ州のジャガイモ博物館は1913年に設立された。ここではアイダホ州のジャガイモのすべて、生産から収穫加工まで、歴史、栄養、そのほかの豆知識まで、がわかるという触れ込みである。また、アイダホ州のジャガイモやその料理法を知るための様々なインターネットサイトや本なども出版されている。さらに、アイダホ州には農業関係の企業も多く、年間136万tものジャガイモを加工している会社まであるのだ。ジャガイモウイルスをアイダホ州立大学で研究する筆者も、毎日ジャガイモに囲まれているようなイメージである。

このように、アイダホ州といえばジャガイモ！というのが連想ゲームの正解となるが、それだけではない。アイダホ州の州都ボイシーは、あるビジネス誌によればビジネスに最高の都市トップ10に入るなど、ビジネス面でも注目されるようになっている。また、別の雑誌でボイシーは、年金受給者のオアシスとも評価されたとのこと。自然環境の良さ、安全性、物価の安さなども魅力のようである。



図4 a.検定済の種いもから栽培されるアイダホ州のジャガイモ圃場、b.近代的なジャガイモ貯蔵庫
(画像提供； Dr. Alexander V. Karasev)

筆者も、アイダホ州の魅力に目覚めた一人である。ジャガイモを通して、また、アイダホ州の新しい姿を通して、さらにジャガイモについての研究を深めていきたいと考えている。そして、アイダホ州のファンとなった今では、より多くの日本の方に、アイダホ州の自然を楽しみ、そして、ジャガイモを食べていただきたいと願っている。

参考資料

本項の一部は、Idaho Potato Commission, <http://www.idahopotato.com/>などを参照した。

著者紹介

Mohamad Chikh Ali (モハマド シェカリ)。
シリア出身。東京農業大学でシリアのジャガイモウイルスの多様性をテーマに博士の学位を得たのち、現在はアイダホ州立大学において博士研究員。妻とシリア、日本、アメリカ生まれの三人の子供たちと暮らす。
(東京農業大学 国際農業開発学科 夏秋 啓子 編訳)